

♪上条千尋 side

～恐怖のあまりに大決壊！～

(いいなー。蓮。この前まで、ボクの方が背が高かったのに。最近になって急に背が伸びて、それに大人っぽくなってきてるんだもん)

頬杖をつきながら、
上条千尋 (かみじょう ちひろ) は、
クラスメートの女の子の横顔をぼんやりと見つめていた。

ときは午前中の休み時間。

蓮は、席から立つこともなく文庫本へと視線を落としていた。

その横顔は、どこか大人びて見える。

跳んだり跳ねたりするのが大好きな千尋とは大違いだ。

蓮は、千尋とは違って物静かな少女だった。

休み時間になってもトイレ以外にはほとんど席を立つことがなく、いつも難しそうな本を広げている。

二次性徴期を迎えて急に大人びてきて、顔立ちもシュッとしてきて、手足も急に伸びてきた。

(急にシュッとしてきて、おかっぱなのになんだか大人っぽく見えるし……)

千尋は、蓮のことを見つめながら嫉妬にも似た感情がわき上がってくるのを感じていた。

昔からおかっぱだったけど、髪型が変わっていないはずなのに、なんだかとても大人びて見えるし。

蓮は、好んで白のワンピースを着て登校してきていた。

ちょっと前までは子供っぽくてちんちくりんで、背の順に並ぶと一番前だったのに、今ではぶっちぎりの一番後ろだ。

それに、この前の体育の授業の前の着替えのとき、蓮はクラスメートの誰よりも早くブラジャーを着けていた。

蓮は恥ずかしいらしくて、すぐに着替えてしまったけど。

ちょっとだけ周りのみんなよりも二次性徴期を早く迎えて、ブラジャーデビューした少女……。

それが、葛城蓮（かつらぎ れん）、という少女だった。

（それなのに、ボクときたら……）

千尋は自らのおっばいに手をあてて、切なげなため息をつく。

たったそれだけで、なんだか急に寂しい思いに駆られてしまう。

千尋のおっばいは、まったく成長する兆しささえも見られなかったのだ。

ただ、最近では乳首が虫に刺されたみたいにむず痒くなってきた、触ると痛い感じかするけど。

でも、変化と云ったらそれくらいだ。

（ボクも、蓮みたいに、ワンピース着てみたいなー。でも、丈が長いと動きにくそうだしなー）

頬杖をつきながら、千尋はそんなことを考える。

千尋は、読書好きな蓮とは違って跳ん

だり跳ねたりするのが好きな、元気いっぱい
の少女だった。

やや明るい茶色い髪をツインテールに
しているものの、服装はといえば明るく
ポップな色合いなTシャツと、パンツが
見えそうなくらい短いスカート。

千尋の太ももは、こんがり小麦色に
日焼けしていた。

それどころか、この夏になってから外
で遊び回っているのも、全身がこんがり
と日焼けしていた。

(いいなー、蓮は色白で。大人っぽく
て。それに引き換えボクときたら)

この前なんて、ツインテールを帽子に
しまってジャングルジムで遊んでいた
ら、男子と間違われてしまった。

それほどまでに、
上条千尋という少女は、男勝りでわん
ぱくな女の子だった。

千尋っていう名前も男の子っぽいし、
千尋も自分のことを『ボク』と呼んでし
まうし。



「千尋ちゃん、今日もいっぱい牛乳飲むねー」

「うん。だって早く大きくなりたいし！」

給食の時間。

いつも千尋は牛乳をたくさん飲むことにしていた。

欠席した生徒のぶんはもちろんのこと、牛乳が嫌いな生徒が残したもののまで全部飲むという徹底ぶりだ。

多い日だと、千尋は給食の時間だけで二リットルくらいの牛乳を飲むこともある。

それでも、まァ、蓮の背丈には追いつけそうにはないのだけど。

だけど、まだ千尋だって性徴期なのだ。

ご飯をたくさん食べて、牛乳をいっぱい飲めばいつかはスラッと大人っぽい体型になれる……はずだ。



給食を食べ終わったら、千尋はいつも校庭で男子たちと混じってドッジボールして遊ぶことにしていた。

運動不足にならないように、蓮を引き連れて、だ。

「千尋ちゃん、私は本を読んでいたいのよ。ドッジボール、あんまり好きじゃないし。ボール当たると痛いしさ」

「へーき、へーき。ボクが守ってあげるからさ！」

嫌がる蓮の手を引くと、いつも蓮はついてきてくれる。

だから、千尋は蓮のことを守ってあげたくなるのだ。

だけど、男子たちも馬鹿ではない。

『おい、まずは葛城を狙おうぜ。千尋のやつは後回しだ！』

『おうよ！』

男子たちは、格好の的だといわんばかりに蓮のことばかりを狙ってくる。

だけど、そうそう簡単にやらせる千尋ではなかった。

「男子たち、蓮のことばかり狙っているとボクが許さないぞ！」

蓮を狙うボールから守るようにして、千尋は見事にキャッチする。

そして助走をつけると、思い切り男子へとボールを投げつけてやり――、

「えいや！」

『痛え！』

千尋が投げたボールは、見事に一人の男子生徒へと直撃していた。

ただ、投げるときに勢いをつけすぎてしまった千尋も勢い余って転んでしまう。

「いてて……。転んじゃったよ……」

とっさに手のひらをついてしまったし、膝小僧も痛い。

どうやら擦りむいてしまったようだ。それになんとかお尻がスースーするような気がする……？

「なんだ、スカート捲れちゃってるし」

前に倒れるように転んだから、千尋は犬のようにお尻を突き出すようなポーズになってしまっていた。

動きやすいように短いスカートを穿いているから、捲れてしまっているようだ。

千尋が愛用しているのは、白とピンクのしましまショーツ。

ふかふかしていて肌触りも抜群だ。

だけど、男勝りの千尋はそんなことは気にせず立ち上がると、スカートの裾を正す。

だけど、なぜか男子たちは気まずそうにしていた。

どうしたんだろう？

「んん？ どうしたんだよ、男子たち。早くボール投げろって」

千尋は挑発するように両腕を大きく広げるも、なぜか男子たちは気まずそうに視線を泳がせている。

それでも千尋は両腕を広げて挑発していると、

「ちょっと……千尋ちゃん」

「ん。どうしたんだよ、蓮」

「あんまりスカートのままで跳んだり跳ねたりすると、その……男子たち驚いちゃうから……」

「えっ？　なんでさ。スカート、短くないと動きにくいし」

「その……。おぱんつ、男子たちビックリしちゃうから」

「は？」

千尋には、蓮にいられていることが、すぐには理解することができなかつた。なぜパンツを見ただけで男子が驚くのか？

この前までパンツなんて普通に見られていたのに。

訳が分からずにいると、蓮は呟くのだった。

頬を、赤らめながら。

「千尋ちゃん、お尻、大人っぽくなってきたし。ふっくら膨らんできて……」

「……そ、そう……かな？　ボクはなんともないけど」

「それでも、ほら、育ち盛りだから」

「うーん。あんまり実感がないけど」

千尋自身、全然自覚がなかったけど、
どうやら男子たちが戸惑っているのはそ
ういうことらしい。

(ボクのパンツなんか見て、なにが嬉し
いんだらう?)

思っていたことが、そのまま言葉にな
ってしまったとでもいうのだろうか?

一人の男子が、ごまかすように言っ
て、思いっきりボールを投げつけてくる
のだった。

千尋は、そのボールを難なく受け止め
てみせる。

『ふんっ。別に千尋のパンツなんか見て
も全然嬉しくねーし!』

『そーだ! そーだ!』

同調するように男子たちがヤジを飛ば
してくる。

どうして男子って、こんなに頭が悪そ
うなんだらう?

最近になって、千尋はよくそんなこと
を思っていたから、

「このいがぐり頭！ ボクの球を受けてみろ！」

思いっきりボールを投げてやると、男子のリーダー的存在は意図も容易く直撃させることができた。

「千尋ちゃん、もうちょっと手加減してあげないとダメだよ」

「だって蓮。あいつら馬鹿ばかりじゃん。なにも遠慮いらないって。ぶっ倒してやろうよ」

「で、でも……」

「……あ」

遠慮がちに腰が引けている蓮を一瞥し、そのときに千尋は気がついてしまった。

——蓮のワンピースから、ブラが透けて見えていることに。

（確かに、今日は暑いし汗もいっぱいかいてるけど！ でも、ブラが透けてるなんて、恥ずかしくて言えないよ！）

自分のパンツを見られてもなんとも思わないけど、蓮のブラジャーとなったら話は別だ。

なんて言えばいいのか分からずに、頭の中が混乱してしまう。

「蓮、その、なんだ……なんていえないのか分からないけどさ。そのー……なんだ」

「どうしたの？ 千尋ちゃん、急に歯切れ悪くなってる」

首をかしげてみせる蓮。

どうやら、透けブラしていることに気づいていないようだ。

どうやって言えばいいか頭を捻っているといると——

しかし容赦してくれなかったのは男子だった。

『あれれ、もしかして葛城、ブラジャー充ててるのか!?!』

『うわっ、エロ!』

『えーろ、えーろ、えーろ』

途端に男子たちがからかいはじめる。

早くも蓮の黒瞳には、今にも涙がこぼ

れ落ちそうなほど潤んできていて――、
これに黙ってられる千尋ではなかった。
た。

「こら！ 男子たち！ ボクの蓮を変な
目で見ろな！」

ツインテールが逆立たんばかりに怒鳴
り散らしてやると、

『逃げろー』

男子たちは、蜘蛛の子を散らすように
して逃げていった。

これで一安心、と。

「蓮、大丈夫？」

「うん。千尋ちゃんが助けてくれるから
平気。ありがとうね、いつも守ってくれ
て。ぎゅー」

「む、むぐっ」

いつものように抱きついてくる蓮。

低学年のころは蓮のほうが小柄だった
から抱きついてくる形になっていた。

だけど、今や蓮はクラスどころか同学
年の生徒のなかで一番背が高くなっている。

しかも、おっぱいも大きくなっている
し。

だから昔は抱きついてきていた蓮は、
今では千尋のことを抱きしめる形になっ
ていた。

蓮自身が成長している自覚がないの
か、昔のように甘えてくるから、内心千
尋は戸惑っていた。

それに、抱きしめられるとちょうど蓮
のおっぱいが千尋の顔に押し当てられる
ことになって息が――ッ。

「むぐっ、むぐ！ 蓮、苦しい！ そんな
に抱きしめられたら息できないよっ」

「むー。この前まではギューって抱きし
めてくれたのに。千尋ちゃんの意地悪な
んだからっ」

「そ、それは……仕方がないし」

「えーっ。なんでー？」

「もうっ、そのくらい自分で考えるの
っ。ボクたちだって、いつまでも子供じ
ゃないんだし」

「やっぱり千尋ちゃんの意地悪ー」

どうやら、身体は大人になりつつある
のに、蓮の心はまだ子供のまもらしい。
ここ最近急に性徴してきたのだから無理
もないと思うけど。

人間ってというのは、見かけが変わっても、意外とすぐに中身まで変われるものではないらしい。

「ボクも、いつかは大人になるのかなあ」
「ん？ 千尋ちゃん、なにか言った？」

どうやら心の中の呟きが、声に出てしまっていたらしい。
気がつけば、蓮のおっぱいホールドから解放されていて、蓮は首をかしげている。

「べ、別になにも言っていないよ……」
ごまかすように呟くけど、蓮はなにもかもお見通しらしい。
「大丈夫だよ、千尋ちゃん」
「な、なにが」
「千尋ちゃんはもう大人っぽいと思うから。いつも私のことを守ってくれる白馬の王子様なの♪」
「は、白馬の王子様……ッ。ボクは男じゃないし、女だし」
「えへ、そうでした、千尋ちゃん」

まさかの恥ずかしいセリフに、千尋は

言葉を詰まらせてしまう。

それでも蓮はよほど鈍感なのか、なんの躊躇いもなく手を繋いできたではないか。

ちょっと前までは手を繋いでもなにも意識はしなかったけど、今は違う。

女同士手を繋いでいるのに、なぜか蓮のことが気になって仕方がなくなってしまう。

なんでだろう？

とは千尋も思うけど、その答えが分かればなにも苦労はいらないわけで。

蓮に手を引かれ、千尋はよろめきながらも歩き出す。

もうすぐ午後の授業が始まろうとしていた。



ごろ、ごろごろごろ……。

「……えっ？」

千尋が異変に気がついたのは、五時限目の国語の授業中のことだった。

夕立の雷のような音が、お腹から低い振動となって聞こえてきたのだ。

この音は——、
ま・さ・か……？

(うそ、まだ学校なのにお腹痛くなって
きちゃうなんて……ッ)

千尋は、学校ではなるべくうんちはし
ないようにしていた。

なんだか恥ずかしい気がするし、それ
にいつも牛乳をたくさん飲んでいるから
下痢気味で、個室の外にまで音が聞こえ
てしまうからだ。

(うう～。今朝、しっかり出してきたの
にっ)

黒板をノートに取りながら、ゴロゴロ
と不協和音を奏でているお腹をさする。
なんでお腹が痛くなったんだろう？
思い当たることといえば……。

今日はお休みの生徒が五人いたから、
その生徒たちの牛乳を全部飲んでしまっ
た。

それにそのあとドッジボールで男子相
手に思いっきり暴れてきた。

……そのとき、お腹が牛乳でチャポチ

チャポ波打っていたような気がしたけど、それがまずかっただろうか？

(確かにお腹タプタプだったけど！ 牛乳飲み過ぎちゃったけど！ ……はうう!?)

ギョルッ。
ぐるるる〜〜。

一段階強くなった腹痛に千尋は苦悶の表情を浮かべてしまう。

腹痛には波がある。

この波を越えることができたとしても、次の波は必ずやってくるのだ。

しかも、その波は今の波よりもずっと高く、苦痛を伴う。

それに痛みに耐えるということは、千尋自身の体力も消耗するということだ。

もう、長くは保たない――。

そのことを理解しているのは、誰よりも千尋自身だった。

(ど、どうしよう……っ。お腹、痛くなってきちゃった。あと……、授業はあと何分で終わるの!?)

教室の前にある掛け時計を見上げると、次の休み時間まであと十五分であった。

(うう、十五分なんて微妙な時間……！
おトイレに行ったら授業終わってそうだし！
そんなの恥ずかしすぎるし！
でも、我慢しきれるかもわからない……！)

ぎゅるる、
ゴロゴロゴロ……。

こうして逡巡しているあいだにも、刻一刻と次のビッグウェーブが迫ってきている。

今は小康状態だけど、大きな波がやってくる時というのは、それだけ潮が引くということの意味する。

(つ、次の波に耐えられそう……？ あと十五分、保つの!?)

千尋の額に、脂汗が浮き上がってくる。

それは焦りからなのか？

それとも苦痛からなのか？
それは千尋自身にも分からないことだ
った。
……が。

(うっ、ううー！ お腹、痛い……!!)

ぎゅるるるる！

まるでお腹のなかで怪獣が暴れ回って
いるみたいだ。

直腸が波打つと『なにか』がお尻のす
ぐそのところにまでやってくる。

それは、おならなのか、それとも…
…。

(お腹痛いっ、痛いっ！ もう、ちょっ
とだけなら……っ)

とっさにおならだと判断すると、少し
ずつ、少しずつお尻の力を抜いていく。

ぷす、ぷすす……。

普段だったら、こんなに恥ずかしいこ
とは人前ではしない。

だけど、その禁忌を犯さなければなら

ないほどに、千尋は追い詰められていたのだ。

(は、はあ……。出ちゃった……。よかった、おならで……)

空気とはいえ、腸内のものを出せばそれだけ楽になれる。

これであと十四分間。

なんとか我慢でき――、

「は、はうう!？」

ぶじゅっっ!

お尻で弾ける、熱いお湯のような感触。

この感触は間違いない。

どうやら『実』まで出てきてしまったようだ。

「ううー！」

なんとかすぐにお尻を閉じるも、どうやら一瞬だけ手遅れだったようだ。

ショーツの内側に、確かに熱い感触を

感じる事ができてしまう。

(や、いやぁ……。も、漏らしちゃっ、た……?)

ほんの少しの量だけど。

この年にもなって、まさか学校でうんちを漏らしてしまうだなんて。

ショーツに染みこんでいく、お湯のような感触に、千尋の心は深い絶望へと沈んでいった。

微かに漂ってくるのは、卵を腐らせたかのような生温かい香り。

それは間違いなく千尋の腸内でドロドロになっている未消化物の臭いに他ならなかった。

(臭いが……。ううっ、こんなに臭うなんて……。！　お願い、誰も気づかないで……。！)

心の中で何度もお願いするも、しかしそう簡単に消えてくれる臭いではなかった。

ただでさえ夏場の教室はエアコンをつけているから閉め切っているのだ。

恥ずかしい臭いは、教室に籠もることになってしまう。

最初に騒ぎ出したのは、男子のなかでもお調子者の生徒だった。

『なんか臭くねー？』

『ああ、誰かが屁こいたんじゃないかね。こういうときって、言い出しっぺが一番怪しいよなあ』

『俺はこんなにくせー屁は出さねえよ。お前の方こそ怪しいんじゃないかねえか？』

『俺だってこんなに臭くねえよ！ ったく、同じ給食食べたのに、なんでこんなにくせー屁が出せるんだよ、なあ!?!』

妙に演説ぶった声に、男子ばかりか女子までも、くすくすと忍び笑いをしてしまっている。

まさか、この腐敗臭が千尋の腸内から漏れ出したものだとは誰も思ってもいないだろう。

(どうしよう……。臭い、みんなにバレちゃってる……。こんなじゃ、トイレに行けないよっ)

こんなに騒がれてしまっは、トイレに立つことさえもできなくなってしまう。

今、ここでトイレに行かせて欲しいと先生にいえば、それはこの悪臭の原因が自分自身だと認めるようなものだからだ。

(我慢しないと……。休み時間まで我慢しないと……)

ゴロロッ！
ギュルルルル。
ゴポポッ！

人間というのは実に不思議なもので、なにかを禁止されるとやりたくなくなってしまうものだ。

きっと、それは本能にも刻み込まれているのだろう。

トイレに行けないと分かった途端に、千尋の大腸は悲鳴を上げはじめたのだ。

「ううっ、あっ、あうう……！」

腸が雑巾のように絞られるのような痛み。

千尋の額に、びっしりと脂汗が浮き上がり、背筋には滝のような冷や汗が流れ落ちていく。

(い、や、あ……。ダメッ、うっ、ううう！)

ぎゅるるるる！
ゴポッ、ゴポポッ！

ついに恐れていた腹痛の大波——。大腸が大きく波打ち、牛乳でドロドロになった未消化物が一気に下ってくる。

(うっ、ううう……。お尻、苦しい……。！)

ゴポッ、ゴポポッ！
ギュル！ ギュルルルルル！

今にも決壊しそうな痛みに、意識が真っ白になる。

少しでもお尻から力を抜けば、きっと楽になることができるだろう。

だけどその代償として、明日からもう学校に来ることはできなくなってしまうに違いなかった。

もしもここで力を抜けば、柔らかい下痢がショーツのなかにぶちまけられて、待っているのは無様な大決壊——。

(あっ、だ、だめえ……！)

……………じゅわぁ……………。

意識が白くなり、じゅわりと股間が生温かくなる。

あまりの苦しみに、おしっこが漏れ出してきてしまったのだろうか？

それとも下痢が？

我慢することで必死になっている千尋には、よく分からなくなっていた。

ただ、ショーツのお尻の部分がジンワリと生温かくなり、夏の熱気に股間が蒸れ返っていく。

(おっ、おおおおお……。も、もう無理い……！ こ、ここで……教室で出しちゃう、しかないの……!?)

腹痛の波に、大きく蠢動している大腸。

雑巾を絞るかのような痛みに、ついに千尋の心は折れ——、

だが、この世の地獄にも神様って言うのはいるのだろう。

「あっ、もう無理……」

フッと千尋の意識が遠のき、お腹からも力が抜けて……、もう決壊を待つばかり……。

だけど、チャイムが鳴ったのは、そんなときだった。

「えっ？」

千尋には一瞬、なにが起こったのか分からなかった。

なんで急にチャイムが？

それになんで授業が終わっているのだろうか？

白みがかかった意識で、次の体育の授業の準備をする生徒たちを眺めていると、そのときになってようやく千尋は気がついた。

「授業、終わってくれたんだ……！」

どうやら魔の十五分を乗り越えることができたらしい。

それに幸いなことに、腹痛の波もいつの間にか越えていたらしい。

腸が破裂しそうなほどのお腹の痛みは、不思議なくらいどこかに消え去っていた。

「よかった……！　これでトイレに行ける……！」

男子たちは早くも体操服に着替えはじめ、女子たちは体操袋を持って更衣室へと向かう。

そんななか、千尋はこっそりとトイレへと立つのだった。



（早くトイレ行きたい……！　も、もう限界だよ！）

周りの生徒たちに勘づかれないようにしながら、千尋はトイレを目指して廊下を急いでいた。

だけど、千尋が目指しているのは教室から一番近くにある女子トイレではなかった。

目指しているのは、滅多に人がこない、その先——。

そう。

旧校舎の女子トイレだった。

今では珍しい汲み取り式の和式の便器で、お世辞にも綺麗とは言えないトイレ。

旧校舎までは片道五分はかかるし、わざわざそんな汲み取り式の好んで使う女子なんていなかった。

(うんち、してるのバレたら恥ずかしいもんね)

だけど千尋をはじめとして、学校でうんちをしたくなかった女子たちには意外と人気があるらしかった。

……まだ一度も、女子と鉢合わせたことはないのだけど。

(うう、早くしないと漏れちゃうよ。それに次は体育だし、早く出して着替えないと)

千尋はやや早歩き(漏らさない程度)で旧校舎のトイレへと向かっていく。



「誰も、いないよねー」

ただでさえ電気が消されて薄暗い旧校舎。

普段は誰もいないので、電気は通っているものの、スイッチは落とされている。

旧校舎は土足禁止……上履きさえも禁止されているので、痛いお腹を堪えながらも上履きを脱ぐ。

そんな薄暗い旧校舎の、女子トイレへと続く扉を開けると、千尋は誰に言うでもなく呼びかけていた。

「……誰も、いない、よね」

確かめるように呟く。

それからドアのすぐ近くにあるスイッチを入れると、たった一つだけある白熱球の明かりに、雰囲気抜群の女子トイレがぼんやりと浮き上がった。

足元にあるスリッパを引っかけて、恐る恐る女子トイレへと踏み込んでいく。

どの個室もドアが開いていた。

どうやら女子トイレには千尋の他には誰にもいないようだ。

薄暗い女子トイレには、何十年もかけて染みついた女子の香りが複雑にわだかまっているばかりだった。

「ほっ」

と、胸を撫で下ろしたのがマズかっただろうか？

ぶりゅりゅりゅ！
じょぼぼぼぼ！

「はうう!？」

無意識のうちに緩んでしまった身体の穴から、不浄のものが出てきてしまった。

ショーツに包まれたお尻がうっすらと盛り上がり、クロッチの裏側がジワッと生温かくなる。

反射的に力を入れたから、すぐに止めることができたが……。

ごまかしようのない量の下痢をショーツのなかに放ってしまったらしい。

「は、早くトイレに行かないと……！」

薄暗い女子トイレ……。

その一番奥の個室を目指して、千尋はよろめきながらも歩を重ねていく。

本当は手前の個室を使いたかったけど、もしも誰か入ってきたら恥ずかしいし。

ねちゃ……、ねちゃ……。

一歩進むたびに、ショーツのなかに漏らしてしまった下痢がお尻の割れ目に食い込んでくる感触。

「うう、お気に入りのしましまパンツなのに……」

今日穿いてきたのはピンクと白のしましまショーツだ。

まだ少ししか漏らしていない（と思う）し、時間も経っていないからトイレを済ませてからすぐに洗えば染みになるということはないだろうけど……、

それでもうんち漏らしてしまった、と

いう事実は千尋の心を確実に蝕んでいく。

気持ち悪い感触に耐えながら、なんとか一番奥の個室へと辿り着き、ドアを閉める。

「ふう……。やっとできる……。うんち、いっぱいできるんだ」

今度は気を抜かないように、吐息をつく。

薄暗い個室――、目の前にあるのは、ちょこんとした和式の便器。

いまとなっては珍しい汲み取り式のトイレだ。

トイレの中を覗き込んでみても、真っ暗で底がどうなっているのかは分からない。

「いつ来てもなにか出そうな雰囲気だよ……」

ただでさえ薄暗いというのに、個室のドアを閉めると更に暗くなる。

それに汲み取り式のトイレからは、何十年という歳月をかけて染みこんだ女子

たちの香りが立ち昇ってきていて、狭い個室はなんとも言えない不気味な雰囲気漂っていた。

「なにも、出てこない、よね……」

そんなことを呟きながら、肩幅に脚を開いて和式便器に跨がる。

あとは、ショーツを降ろしてしゃがむだけ。

たったそれだけで、この苦しみから解放される。

だけど、同時に千尋は思いだしてしまったのだ。

……この旧校舎の女子トイレに伝わる怪談を。

その怪談とは。

「た、確か……」

思いだしたくないと思っても、こういう怖いときに思いだしてしまうのが怪談というものだ。

千尋は、トイレに跨がったまま、ショーツを降ろすことも、しゃがむこともできずに怪談を思いだしてしまう。

(一番奥の個室のドアを三十回ノックすると、トイレの中から大きな手が出てきて、引きずり込まれちゃう……)

確か、そんな怪談だったはずだ。
奇しくも、千尋が今いる個室は、一番奥——。

ちょっとだけ怖くなってしまうけど、しかし千尋は怖さをごまかすように一笑に伏すのだった。

「へーき、へーき。大体、じょーしきの的に考えて、三十回もノックする訳ないし！ ボクだって、もう子供じゃないんだし！」

無理に明るく言いながら、ショーツを降ろし——、
そのときだった。

ガタンッ、
唐突に女子トイレに響いたのは、扉が閉じる音。

そして一人分の足音。
どうやら、誰かが女子トイレにやってきたらしい。この人気の無い、不気味なトイレに……。

「ひ、ひい！」

むりゅりゅりゅりゅ！

いきなりの来訪者に驚いて、お腹に力が入ってしまったのだろう。

千尋は立っただけというのに、勢いよく下痢を漏らしていた。

ショーツのなかがお湯のようなもので満たされて、もっさりとした重たくなる。

だけど、今の千尋にはそんなことを気にしている余裕なんて残されていなかった。

「だ、誰……!? 誰か来たの!？」

その問いかけに、応える者は誰もいない。

ただ、上履きを穿いているのだろう、控えめな足音は、ゆっくりとこちらの方へと近づいてきているようだった。

そして――、
あろうことか、千尋が入っている一番奥の個室で足音が止まったではないか。

「う、うそ……。こんなところに、だ、誰……？」

その問いかけの返事の代わりに、
コンコンッ、
控えめなノックの音が響き渡る。

「ひっ、ひい」

すぐにドアを開ければいいのに。
そこに誰が立っているか確かめればい
いのに。

それはわかってはいたけど、千尋には
たったそれだけのことがどうしてもでき
なかつた。

脳裏によぎるのは、例の怪談……。

「ダメ……。ノックしないで……。っ」

とっさにドアから離れようと、千尋は
ドアとは逆の壁へと背中を貼り付かせて
距離を取る。

それでも、

コンコンッ、コンコンッ。

ノックは続いていた。

「いや、嫌だよ……っ。誰、なの……!?
こんな怖い意地悪するのは……っ」

もはや恐怖のあまり、千尋は上手く声を上げることさえもできなかった。
今にも消え入りそうな、震えた声。
個室の外に聞こえているかどうかさえも怪しかった。

「あっ、あああああ……！」

ついに千尋は腰を抜かしてしまう。
膝の力が抜けると、冷たい石床に尻餅をつき――、

べちょっ。

既に漏らしてしまっていた下痢が、床とお尻に潰されて無様な音を立てる。
柔らかいうんちが、むにゅっとお尻に食い込んできて、なんとも言えない不快感に襲われた。

だけどいまの千尋にとっては、どうでもいいことだった。

たとえば、スカートが捲れ上がって、下

痢を漏らしたショーツが丸見えになって
いたとしても、だ。

コンコン、コンコン。

いまだノックは続き、千尋のことをじ
わじわと追い詰めていたのだ。

「もう嫌だよお……っ」

じわり、

おまたが生温かくなると、千尋のお気
に入りのしましまショーツのクロッチの
部分に暗い染みが浮き上がる。

それでも千尋は脚を M の字に開き、
ショーツが丸見えになっても、後ずさろ
うとしていた。

スリッパが脱げてしまっていることに
も気づかずに。

この瞬間、千尋は自らが少女と言うこ
とを忘れていた。

それほどまでに、少女として無様な姿
だった。

直後——。

それは起こった。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！ あっ！
あっ！」

プシュッ！

プッシュァァァァァァァァァァ！

少女の恥ずかしい染みを隠すための二重布……クロッチをやすやすと突き破るほどの勢いで、おしっこが噴き出してきたのではないか。

千尋は、恐怖のあまり腰を抜かし、失禁してしまったのだ。

クロッチを突き破って噴き出してきたおしっこは三十センチほど飛ぶと地面に落ちてレモン色の水たまりとなって広がっていく。

「い、いやぁ……！」

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

我慢していたせいで千尋の膀胱にはたくさんのお水が溜まっていた。

漏れ出してきたおしっこは会陰を伝って、千尋のお尻をイタズラっぽく撫で回していく。

千尋のお尻を中心として、大きなおし

っこの湖ができあがった。

古い、タイルの石床だ。

そのタイルに、千尋の失敗が染みこんでいき、これからずっと残されていくことだろう。

よく見れば――、

千尋が作り出したおしっこの湖の他にも、タイルには別の染みが残されていた。

きっと、この女子トイレでは何人もの女子がこうして怪談を思いだし、恐怖のあまりに失禁してきたに違いなかった。

だけど、今の千尋がそんなことを気にしている余裕なんて残されてはいない。

「もう、嫌だよお……！」

ただ、おしっこを漏らしながらも脚の力だけで後ずさろうとしているばかりだった。

漏らしながら後ずさっているから、下痢とおしっこの筋がナメクジの筋のように残ってしまっている。

どんなに後ずさっても、この恐怖からは逃げることはできないというのに。

そのことに気づかずに、千尋は脚に力を入れてしていると――、

ビチッ！　　ビチチッ！

「あっ！　　いっ、はうう！」

しましまショーツから、くぐもった炸裂音が響き渡る。

千尋は恐怖のあまりおしっこばかりか、下痢までも漏らしはじめてしまったのだ。

すでに茶色く染まっていたショーツに、新たな茶色が生み出され、こんもりとショーツが盛り上がっていく。

恐怖のあまり脱糞――。

しかし、千尋はそのことに気づかずに脚の力だけで後退しようとしている。

トントンッ、ドン、ドンドンドン！

心なしか、ノックの音が強くなったように思える。

「い、いや、だよお……。もうどこか行って……！」

ビチッ！　　ブリュリュ！

ビチビチビチビチビチ！

尻餅をついているというのに、お粥のような下痢は易々と肛門から滑り出してくると、ショーツのなかに満ちあふれていく。

足口から黄土色の下痢が溢れだしてきて、おしっこの湖へと溶けていく。

千尋は茶色い汚泥が混じった湖のなかで脚を動かすことになった。

「だ、誰か……、助けて……」

このままノックが三十回続けば、トイレから手が伸びてきて引きずり込まれてしまう……。

さっきまで信じていなかったけど、こうして一人でいるときにノックされいると、もはや信じるも信じないもなかった。

このままだと確実に――。

「助け……た、助しゅけ……て……あっ、あぁっ」

さっきからカチカチと音がするかと思っていたら、それは千尋自身の奥歯が恐

怖のあまりに擦れ合う音だった。

だが、気づいたからといって止められるものでもない。

「あっ！ あっ！ あっ！ あっ！」

ビチビチビチ！

ブボボッ！ ブボボボボ！

千尋の決壊してしまった肛門からは、黄土色でお粥のような下痢が噴出し、ショーツをパンパンに膨らませていく。

足口からは汚泥がはみ出しておしっこと混じり合い……、千尋が穿いていたミニスカートは、おしっこによってビタビタに濡れそぼっていた。

「もう、いやだ、よお！ はひっ！ ひいいい！」

ブジュジュッ！

ブピピッ！ ブボボボッ！

引き攣った悲鳴に応えるようにして、クロッチを突き破っておしっこが噴出し、そしてついに……。



☆製品版はうんもぎ無しです☆

「あっ、あああ！ おっ！ おっ！ お
おおおお！」

ブリブリブリブリ！
ブボボ！ ブジュジュ！

お粥のような下痢は、ついに千尋の大事
な部分……、股間にまで達してしまう
う。

少女の肉のワレメが下痢に満たされて、未だ目覚めていない肉芽——クリトリスにネットリと絡みついてくる。

「ああッ!? あっ！ あっ！ アヒッ!?
ヒイン！」

それは生まれて初めて感じる微弱電流
だった。

こともあろうに、千尋は自らの漏らした汚泥によって、生まれて初めて感じてしまっていたのだ。

じゅわり——、
小水とは明らかに違う、熱い体液が滲み出してくると、トクンッ、鼓動が熱く早くなっていく。

それが性的な刺激のせいなのか、それ

とも恐怖のあまりに鼓動が早くなっているのか。

それは千尋自身にも分からないことだった。

「アッ、アヒ！」

ただ、引き攣った悲鳴を上げるたびに、

キュンッ、キュンッ！

千尋の縦筋はチョコレート塗れになっているというのに官能的に痙攣し、それと同時に、

ブボボッ！ モワァ……。

ショーツも更にパンパンに膨らんでいく。

「アッ！ アヒッ！ ヒンッ！ ひい！
痺れて……うう！ 変だよ……こんなの！ ひっ！ ひうう！」

股間から生み出される微弱電流に、千尋は漏らしながらも戸惑ってしまう。

これも怪談のせい!?

このままトイレに引きずり込まれるの!?

恐怖のあまりに漏らしながらも後ずさろうとしている……、そのときだった。

——ごお おお おお おお ……。

汲み取り式のトイレから、低い呻き声のようなものが聞こえてきたのだ。

真っ暗な穴から生々しい香りが立ち昇ってくると、狭い個室に満たされていく。

その臭いのほとんどが、まさか千尋自身が漏らした下痢だとも気づかずに――

千尋の背中は、ついに背後の壁に当たってしまう。

「ああっ！ あっ！ ひっ、ひいっ」

ブボボボボ！

ぷっしゅうううううう！

千尋は引き攣った悲鳴を漏らし、大小便を噴き出しながら、急速に意識が遠のいていく。

「えっ、え`え`え`え`！」

ブワッと涙が溢れ出し、口からは蟹のように泡を吹き――、千尋は恥辱のなか、ついに気を失ってしまった。



トントンッ、トントンッ。

個室のなかで無様な姿を晒しながらも気を失った千尋――。

そんなことを知らずに、ドアの外では一人の少女がノックし続けていた。

スラッとしたスタイルで、手足も大人のように伸びた、黒髪おかっぱの少女……。

それは蓮に違いなかった。

「千尋ちゃん……？ 千尋ちゃん」

蓮は、それはそれは控えめな声で個室の中にいるであろう千尋の名前を呼び続ける。

その声が、個室の中にまで届いていな

いとは知らずに。

ただ、ノックの音だけが届いているとも知らずに。

「なんか、様子がおかしい……？」

蓮はノックをやめて、耳を澄ませてみる。

しばらくすると……。

ブリブリブリッ。

ビチッ！　ビチビチビチ！

どうやらちゃんと『出してる』みたいだけど……、それにしてはなんの返事がないのは奇妙な話だった。

せめて、ノックくらい返してくれてもいいのに。

「千尋ちゃん、千尋ちゃん」

呼びかけても、なんの返事もない。

そもそも、なんで蓮がここにやってきたのかというと。

「私も、うちするときは旧校舎ですることにしてるんだけどなー。けど、まさ

か千尋ちゃんもこの穴場を知っていたとは……」

実は蓮もお腹を壊してしまったときは旧校舎のトイレのお世話になることにしていたのだ。

今日は偶然にも蓮もお腹の調子が悪くて、千尋ちゃんの背中を追いかけていたらここにやってきたというわけだ。

「千尋ちゃん。一番奥のおトイレ、もう紙がないよー」

呼びかけてみるけど返事はない。

この一番奥の個室に紙がないのは蓮が一番よく知っていた。

なにしろ、この前この個室でトイレトペーパーを使い切ったのは蓮自身なのだ。

旧校舎のトイレは、滅多に紙が補充されないから千尋に教えておこうと思ったのだが……。

だけど、肝心の千尋からの返事がなにもない。

「千尋ちゃん。いるんでしょう？」

耳を澄ませていると――、

しゅiiiiiiiiiiiiiiiiii……。

かすかな、本当にかすかなくぐもった水音が聞こえてきた。

どうやら用を足してはいるみたいだけど……、

「だけど、やっぱり拭けないと困っちゃうよね」

個室の前でそんなことを考えていたときだ。

「えっ？」

蓮は、ある異変に気がついて、後ずさってしまった。

なにしろ、個室へと続くドア……その足元の隙間から、大きな水たまりが広がってきたのだ。

「うわわっ。なに、これ」

ビクッリしてよく見てみると、その水

たまりにはお粥のようなものが溶けていて、この女子トイレよりもキツイ臭いを放っているようだった。

もしかして、この水たまりは千尋ちゃんの……？

「千尋ちゃん、大丈夫？　おーい、大丈夫ですかー？　お客さん、終点ですよー」

ヒソヒソ声出呼びかけても、しかしどんなに待っても返事はない。

その代わりに、ドアの下から広がっている水たまりは、更に大きさを増していた。

「ちょっと失礼しますねー」

近くにあった大きめのバケツをひっくり返して、その上に乗って個室の中を覗き込んでみると……、

「ち、千尋ちゃん!？」

上から個室を覗き込んで、蓮は目を疑ってしまった。

なにしろ千尋が壁を背にして、Mの

字に脚を開いたまま気絶していたのだ。

スカートが捲れ上がって丸見えになっているしましまショーツは、お粥のような下痢にパンパンに膨らんでいて、足口からも溢れ出していた。

千尋のお尻を中心として大きな湖を作り出しているのは……、おしっこ、なのだろう。

そのレモン色の体液にお粥のような下痢が溶け込んで濁り、個室の外にまで広がっている。

ドアの下から広がってきた水たまりは、どうやら千尋ちゃんのおしっこで間違いないらしい。

「だけど、なんで目の前におトイレあるのに……。なにかに怖がってたみたい……。あ、それに紙は補給されてたんだ」

まさか自分に原因があるとも知らずに、蓮は首をかしげてみせる。

だけどいつまでもバケツの上に立って覗き込んでいる場合じゃなかった。

「千尋ちゃんを起こさないと、だね」

蓮は一度バケツから降りると、トイレから出ていく。

そして近くの教室から机や椅子を持ってきて、個室のすぐ脇に積み上げていく。

蓮が何度か教室とトイレを往復すると、机と椅子で個室に簡単に入ることができる階段を作ることができた。

「よいしょ、よいしょっと……」

今にも倒れそうな即席の階段を、バランスを取りながら登っていき……。蓮はなんの躊躇いもなく、千尋が気を失っている個室へとジャンプする。

「んっ！」

着地したときにちょっとだけ脚が痛かったけど、これくらいの痛みなら千尋ちゃんのためなのだ。なんてことはない。

「千尋ちゃん、千尋ちゃん……。大丈夫？
こんなところでどうしたの？」

蓮は穢れた湖に、なんの躊躇いもなく踏み込むと、千尋の身体を抱えるように

して揺り動かす。

するとすぐに千尋は意識を取り戻してくれた。

「ん、んんん……？」

「千尋ちゃん、大丈夫？」

「あれ、ここはどこ……？ ボクはなんで寝てたの……？」

「よかった……。千尋ちゃん、どこか痛いところない？ 誰かに酷い目に遭わされたりしてない？」

「ボクは……平気だけど……。あれ、なんかおまたが変な感じがする……。なんでだろ……。あっ」

この時になって千尋は気がついたらしい。

自分がおしっこばかりか下痢までも漏らしてショーツをパンパンに膨らませていることに。

「う、うそ……。なんで……？ ボク、漏らしちゃったの……？」

「私が来たときには、もうこうなっていたけど……。なにがあったの？ 話せることがあったら話してくれたら嬉しいな」

「そんな……。恥ずかしすぎるよ……」

「なにかここであったの？」

「そ、それは……」

千尋は気まずそうにスカートの裾を整えると、下痢でパンパンになっているショーツを隠す。

それでも個室に漂う濃密な腐敗臭と、大きな湖を隠しきれぬはずもなく。

観念したかのように、千尋は消え入りそうな声で呟くのだった。

「誰かが、外からノックしてきて……、それで怖くなって……」

「ちょっと待って、ノックしたのはって私だよ。千尋ちゃんに紙がないって教えてあげようと思って」

「えっ？」

「紙がないって……」

「でも、まだたくさんあるけど」

「うん。補給されてたみたい。この前、私が最後に使っちゃったから、それで千尋ちゃん困るんじゃないかと思って教えておこうと思って……」

「……と、言うことは、外からのノックって、もしかして……蓮だったの？」

「……うん」

「はあああああ……」

よほど千尋は怖かったのだろう。
千尋はどこか安堵感が混じった深くため息をついてみせた。

「ボクはてっきり、学校の怪談なのかと……」

「……えっ、千尋ちゃん、怪談なんて信じてるの？」

「悪い？ 怖かったんだから」

「ううん。怖がりな千尋ちゃんも可愛い♪」

ギュッと抱きつくと、胸のなかで千尋はムガムガと暴れている。それでも蓮はしばらく小さな少女の身体を離さなかった。

こうしたまま、多分五分くらい経ったと思う。

千尋も諦めてくれたのか大人しくなったころになって、ようやく蓮は抱擁を解いた。

「そろそろ落ち着いてくれたかな」

「うん。もう大丈夫、だけど……」

「おぱんつ、交換しないとね。次の授業は体育だから、ブルマ持ってくるよ。千

尋ちゃんはそのあいだにおまた綺麗にしておいてね」

「お、お願いします……」



蓮が教室へと体操袋を持ってきて、旧校舎のトイレに戻ってきたのは十分くらい経ってからだった。

「おーい、千尋ちゃん。ブルマと体操服、持ってきたよー」

「ありがとう、蓮」

「投げ入れるから、ちゃんと受け取ってね」

「うん」

千尋の返事を待ってから、蓮は持ってきた体操袋を個室へと投げ入れる。

体操袋の中には千尋の体操シャツと、紺色ブルマ、それに――。

「蓮、なんか可愛いショーツが入ってるんだけど」

「えへへ。それ、私のお気に入りのネコさんショーツ。替えのショーツは念のためいつも用意してあるの。今日は千尋

ちゃんに貸してあげるよ」

「あ、ありがとう……」

「ビニール袋も入れておいたから、汚しちゃったシューズはその中に入れておいて」

「うん。さすが蓮、準備がいいね」

「そんなことはないよ」

遠慮がちに呟くと、蓮も隣の個室へと入って体操服に着替えていく。

二人の着替えは五分ほどで終わった。そろそろ急がないと体育の授業に間に合わないかも知れない。旧校舎から昇降口で靴を履きかえてグラウンドに向かうのは、意外と距離があるのだ。

「……蓮、変なところ、ないかな」

個室から出てきた千尋は、どこかへっぴり腰になっていた。

ブルマを穿いているから、余計にお尻が後ろに引けているのが分かってしまう。

さっきまでうんちでパンパンになっていたシューズを穿いていたのだから無理はないのだろうけど。

きっと、個室の中では千尋は汚泥に塗れてドロドロになった秘部やお尻を、何回もティッシュで拭っていたに違いなかった。

「もっと背筋をシャキッと伸ばした方がいいと思うな。その方が千尋ちゃんらしいし」

「で、でも……、変なところ、ない？ おまた、汚くない？」

「おまたが汚いなら、千尋ちゃんにシューズなんて貸したりしないんだから」

「う、うん……。蓮のネコさんシューズがついててくれるんだもんね。ボク、頑張るっ」

「それでこそ私の白馬の王子様なの」



蓮のとっさの機転もあって、千尋は学校でうんちを漏らしたことを誰にも知られることなく体育の授業を受けることができた。

だけどただでさえ真夏の直射日光が降り注ぐ、真っ白なグラウンド。

しかも千尋は身体を動かすのが大好き

だから、蓮のショーツを穿いていることも忘れて跳んだり跳ねたりしているうちに、すっかりネコさんショーツは汗を吸ってぐしょぐしょに濡れていた。

そのことに千尋が気づいたのは、体育の授業を終えてからのことだった。

女子更衣室の同じ個室で着替えていると、千尋はそれはそれは気まずそうに口を開くのだった。

「……蓮。ぱんつ、汗でぐしょぐしょになっちゃったから、明日洗って返すね」

「えー。そのまま返してくれてもいいのにー」

「さすがにそれはボクが恥ずかしいよ」

頬を赤らめると、千尋は体操シャツとブルマを綺麗にたたんで巾着袋に入れてしまった。

蓮としては、そのまま返してくれても、まったく問題なかったのだけど。

まさかそのことを千尋にいうわけにもいかず、蓮も大人しく体操シャツとブルマを袋にしまって、白のワンピースに着替えていくのだった。

☆体験版はここまで☆

楽しんでもらえたら嬉しいです！

※製品版はうんもぎ無しです※